

「20年委員会」が目指すもの

今村 剛（東京大）

「20年委員会」

＝「宇宙科学の今後20年の構想を検討する委員会」

経緯

- 2014年末にISASから宇宙科学コミュニティにRFI(研究領域の目標・戦略・工程表提供のお願い)を送出し、集まった回答をISASがとりまとめている。その過程で、宇宙科学の将来計画を継続して改善していくために、今後20年ほどの長期ロードマップを理工学のコミュニティが主体となり提言する必要性が強く認識された。
- 今後10年の中型計画が概ね固まってきたことを受けて、以下を具体化する必要が出てきた。
 - 今後10年の小型計画
 - 10–20年後の中型計画と、そのために今後10年間に注力すべきキー技術
- そこで理・工学委員会のもとに「宇宙科学の今後20年の構想を検討する委員会(通称:20年委員会)」を設置し、検討を開始することになった。

20年委員会メンバー

今後20年近く現役である若手・中堅が中心

理学

関根康人（東大）
清水敏文（ISAS）
矢野創（ISAS）
山崎典子（ISAS）
三好由純（名古屋大）
金田英宏（名古屋大）
米徳大輔（金沢大学）
住貴宏（大阪大）

工学

津田雄一（ISAS）
福田盛介（ISAS）
野中聡（ISAS）
船木一幸（ISAS）
船瀬龍（東大）
木村真一（理科大）
笠原次郎（名古屋大）
姫野武洋（東大）

全体とりまとめ
今村剛（東大）

ここに理工学委員会の幹事が参加

委員会のタスク(1)

- 日本の宇宙理学/工学における現状の開発能力とこれまでに考えられている計画を、ISASが整理した「宇宙科学の実行戦略」文書を参考にして把握したうえで、候補となっているミッション構想の科学的価値や実現可能性を総合的に検討する。(前回RFIから時間が経っているため、コミュニティからの新たな情報収集を、適宜、理工学委に対して要求する)
- 可能であればミッション構想に優先順位をつけ、理学と工学の競争的かつ協調的な発展による今後20年のロードマップを策定する。シナリオは複数あってよい。ただし、ここに含まれないミッションは提案できないということにはならない。
- 2030年代を見越した長期的な方向性を明確にしたうえで、2020年代になすべきこと、手に入れるべきキー技術を抽出する。

委員会のタスク(2)

- RFI回答に示された各コミュニティの意見を適切に反映しつつ、その一方で、自由な発想で構想を練る。コミュニティ横断的かつ理工合同の議論により新しい視点が得られることを期待する。
- 理(サイエンス)・工(技術)のマトリクスを意識する。
- 工学委員会では工学の視点からのミッション提案の方向性と技術開発戦略の構築を別途進めている。この工学委の検討メンバーが20年委の委員ともなっており、適切に情報共有しつつ検討を進める。
- 技術的成立性については、課題を指摘するものの、審査を行うわけではない。必要に応じて理工学委を介して専門家を招いて意見を求める。
- 人材育成の戦略についても議論する。

委員会のタスク(3)

- 20年委員会は今後20年の構想に関する素案を作るとともに、理工学委員会と宇宙研との議論を経て、1年後を目処に最終的な提言をまとめる。その際には理工学委員会が各コミュニティとの仲介の役割を担う。
- 月1ペースで会合を持ち、来年6月ごろに議論の途中経過を理工学委員会で報告し、まとめの方向性を固める。
- 今後も定期的にロードマップ改訂を行う。その時間スケールやメンバー構成については今後検討する。

(改めて) 目指すもの

- 実現への行程が見えるシナリオ（長期展望と直近の実行計画）
- 宇宙科学コミュニティ主体の議論
- コミュニティ横断・理工合同のブレインストーミングによる新しい視点